

mediopos 13

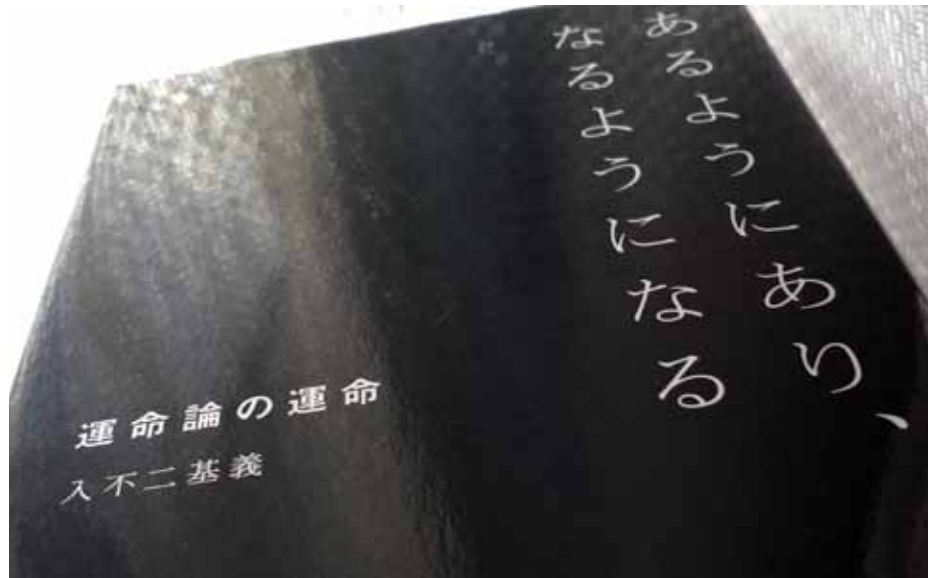
2015.9.13 ~ 2015.10.7

【神秘学ポエジー～風遊戯 第31集】

media-photo-poesie ヴァージョン

mediopos301-325

神秘学遊戯団



■入不二基義『あるようになり、なるようになる／運命論の運命』（講談社 2015.7）

「あるようになり、なるようになる」は、「運命」と同型であるような「自由」（あるいは自在）を表すのにも相応しい。物語的な自由を溢れ出す自由（自由からの自由）の力は、自由の相貌を台無しにする危うさを秘めつつ、「何でもあり」という全的な開放である。その相貌なき「何でもあり」から、相貌を持った「何かである」への転落によって、自由は一定のカタチを獲得しているが、その形からはみ出ること、形を無くすこともまた自由に含まれている。この「何でもあり」と「何かである」のまさに<中間>＝表面の反復を、「あるようになり、なるようになる」は表現しようとしている。／また、「あるようになり、なるようになる」からは、「諦め」のようなものも感じ取れるし、その繰り返しの内には「執拗さ」も、さらには「楽観」も感じ取ることができる。ここでは、諦めとは「明らかにする」ことでもあり、執拗さとは「暗闇の中で手探りをやめない」ことであり、楽観とは「屈託の無さ」である。この相反するような「諦め」と「執拗」あるいは「楽観」という態度を二焦点としていることもまた、「あるようになり、なるようになる」を、楕円形で拮抗的な運命の表現として相応しいものになっている。「運命に乗る」ことは、諦めつつ執拗でもあり楽観的でもあるという拮抗を生き延びることだからである。」

あるようになり
なるようになり
ないようにはなく
ならないようにはならない

命は運ばれるのか運ぶのか
命は立てられるのか立てるのか
自由はすべてに向かって開かれながら
みずからの命へと向かっていく

かたちなきものから
かたちあるものへ
かたちあるものから
かたちなきものへ

生まれた音が刻まれる
楽譜から音楽が流れだす
自由なのか不自由なのか
音楽はそこに流れている

生まれた言葉が刻まれる
本から言葉が流れ出す
自由なのか不自由なのか
言葉はそこに編まれている

生まれた私が呼吸する
私から流れ出すさまざまな形
自由なのか不自由なのか
私はそこで命を泳いでゆく



宇宙は多面体であるか
ならば私も多面体であろう

宇宙は数と形であるか
ならば私も数と形であろう

宇宙は対称性のもとにあるか
ならば私も対称性のもとにあるだろう

宇宙は非対称を遊んでいるか
ならば私も非対称を遊ぼうではないか

■シュボーン・ロバーツ『多面体と宇宙の謎に迫った幾何学者』（日経BP社 2009.1）

「コセクターが自らの専門分野を定義した次の言葉はよく引用される。「幾何学とは、フィギュア (figure) とフィギュアの学問である。ひとつは図形を意味するフィギュア」——三角形、立方体、12面体など——「であり、もうひとつは数字を意味するフィギュアである」。コセクターは泡や多孔性の海綿、ハチの巣の巣室、パイナップルのつぼみやひまわりの幾何学構造を楽しんだ。教壇に立っていた頃、コセクターは、自宅の庭で、小柄な自分を見下ろすような背の高いひまわりを摘んでは、トロント大学へ向かう市営バスに黄色い花びらを持ち込み、それを教材として使った。ひまわりの種のひとつひとつに赤いマニキュア液で印を付けて、種の優美ならせん配列が持つ幾何学的に完全な黄金比を浮き彫りにして学生に見せることが目的だった。この現象は葉序と呼ばれている。」
「コセクターが幾何学に取り憑かれた背景に、エリート主義的な性癖とも言える美の追究があったことはたしかだ。だが、古典幾何学は、パターンと形の美を讃えるだけの学問ではなく、きわめて実用的な側面も持っている。大地を歩いても地球が丸いことに気づかないのと同様に、現代の人間が幾何学自体や幾何学が日常に及ぼす影響に気づくことはないが、幾何学はあらゆるところに存在し、その影響が及ぶ範囲は果てしない。」

「対称性はコセクターの幾何学の中心だった。コセクターは、絶えず形の対称性を追い求めていた。古代の幾何学の目標が定理の証明というよりは、宝石のように美しい幾何学物体を発見することだったという意味で、コセクターは古典幾何学者だった。彼は、多種多様な幾何学構造を探究して列挙し、それらの幾何学構造が、その対称的な性質を通じて互にどう関連しているかを解明した。コセクターは、著書の『幾何学入門』の序文でこう述べている。「すべての仕事を貫き、結び付ける糸は」——実際に、彼の生涯と仕事を貫いた糸もそうだったが——「一言でいえば対称性である」。

mediopos-303

2015.9.15



■大和岩雄『十字架と渦巻』（白水社 1995.9）

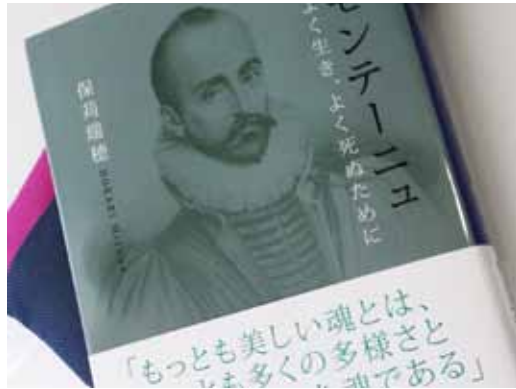
「年の終りと年の始めを貫く棒のような注連縄は、終わりりと始め、生と死を、螺旋・渦巻状に表現しているのだが、そうした表現がウロボロスであり、伏羲女 図であり、二つ巴型太極図である。ウロボロスは蛇の頭と尾を円環で結び、伏羲女 図は男と女の下半身を蛇体にして螺旋・注連縄状に結び、二つ巴型太極図は二つ巴を円環で包んでいる。／このような相反する生と死とは一体の表裏であり、終わりりと始めは結びついており、ウロボロスなのだから、一体の円環に力点を置けば、丸山（圭三郎）の「生の円環運動」は、一体の表、円環の始めを強調した言い方であるといえる。私は丸山と同じ意味ではあるが、死を加えて「生と死の円環運動」といいたい。というのは、丸山のように一方を強調するのではなく、生と死、表と裏、始めと終り、または、光と影、陽と陰、コスモスとカオスの両方を標示したいからである。この二元は縄のように硬く結びついている。／井筒俊彦は「カオスとアンティ・コスモス」で、カオスはコスモスの外にあるのではなく、「コスモス空間そのもののなかに構造的に組み込まれている」と書き、丸山は「フェティシズムと＜永遠回帰＞で、「カオスは絶えずコスモス化されていても、カオス自体がコスモスの産物であり、しかもカオスが再びコスモス化されることによってしか新たなカオスは生じないという円環構造なのである」と書く。また「大文字の＜生（レーベン）＞とは、小文字の生（性と食）と死く肉体機能の停止・物質的終息＞を包み込んだ螺旋状の渦流なのだ」とも書き、円環構造の運動を螺旋状渦巻とみる。／私は渦巻文はカオス表現、十字架をコスモス表現と大別したが、渦巻文はコスモスを内包したカオスであり、十字形（十字架）はカオスを内包したコスモスである。したがって十字架は死と再生の象徴になっており、十字形には動き（円環運動）をあらわした卍（逆卍）や（○のなかに十）表現があり、十字架は渦巻と一体なのである。」

「死を終末の時とみて、海の渦巻や怪魚に人々が呑み込まれる終末画が、中性のキリスト教国では描かれていた。終末画が描かれたのは、始めがあり終りがあると、時間を直線的に見ていたからだが、（・・・）このような終末観は、回転する十字形を静止した十字形とし、キリスト教のシンボルとしたときに生まれた。しかし終りは始めである。時間は直線ではなく円環であり、死は終末ではない。朝の来ない夜はない。／時間だけではない。空間も回転する。時空の円環運動は渦巻・螺旋のように立体的であり、回転しながら上昇し下降する。そうした渦巻・螺旋運動の中に、すべての生きとし生けるものの生死はある。その渦巻の中心象徴として十字形があった。十字架がた卍（逆卍）表現になっているのも、十字架が円環運動の中心象徴だったからである。／中心は求心力と遠心力をもって回転する。統合し分離し、離れてまた結び合う。生と死はそうした円環運動の中にある。」

まわるまわる
生は死となり
死は生となり
まわるまわる
始まりは終り
終りは始まり
引いては返し
返しては引き
コスモスゆえ
カオスは生じ
カオスゆえに
コスモスへと
繋がり分かれ
分かれ繋がり
円は渦を巻き
渦はくるくる
まわるまわる
永遠をまわる
光と影の交錯
陰と陽の変転
一が二へ三へ
そして一へと
まわるまわる

mediopos-304

2015.9.16



■保苺瑞穂『モンテーニュ／よく生き、よく死ぬために』（講談社学術文庫 2015.9）

「『エッセー』にはたしかに、一人の人間が語っているという手応えがあって、言葉のなかから、ほとんどその人間の肉声が伝わって来る感じがする。かれは生きている刻一刻を、神様が恵んで下さった贈り物のように受け取って、それを楽しむゆとりを人々から奪ったように見えたが、かれはその渦中であって、日常の生活をできるかぎり穏やかに生きて楽しむことを自分のもっとも大きな仕事にした。これは享楽主義というのではなく、命あるものの本能であり、務めである。その仕事に比べたら、カエサルやアレクサンドロスが生涯をかけてやった仕事、戦闘に勝つことも、国を統治することも、財を成すことも、付随的なことに過ぎないと言っている。老いが来て、生命の力が衰えて行くのを感じると、かれはそれまでの倍の力で生きていることを味わおうとした。かれがあれだけ本を読み、勉強したのも、それによって知識やなにかの肩書きを得るためではなく、よく生きて、よく死ぬためだった。そういう人間が四百年前のフランスにいたのである。」

「人間と世界についての認識は一貫して、変わるところがなかった。『弁論』の終わりに近いところで、かれはこう書いていた。「結局、われわれの存在も、対象の存在にも、なに一つ永続する実在はない。われわれも、われわれの判断も、死すべきすべてのものも、絶えず流転する」。この認識がかれの考えの基本にあって、晩年になっても変わることはなかっただろう。変わったのは、人間と世界に対するかれの態度である。すなわち変化がモンテーニュにとって、その意味を根本から変えてしまったことは前に見た通りである。人間と世界に変化があるから、そこに多様さが生まれる。そして、この多様さが、享受することに徹したかれの生きる喜びの源になる。それゆえその変化を受け入れる「もっとも多くの多様さと柔軟さをもった魂」が「もっとも美しい魂」であるとかれは信じたのである。／人間は、その矛盾や変化のゆえに、空しいvain存在と見なされてきた。しかし、不変であることは生命の否定であって、波のうねりのように変貌しつづけること ondoyant が人間の常態であることが、確認されるだけでなく、肯定される。外界もまた変貌を続ける。モンテーニュのなかで、人間と外界に対する認識はついに完了することがなかった。理性が統括する哲学も成立しなかった。かれはデカルトの出現に先立って、デカルト的悟性であることを拒否したかのようである。しかし、かれは、その代償として、世界はかれとともにあった。コーカサスの岩山が動くのを感じ、世界の「一日ごとの、一分ごとの推移」を感じ取る鋭敏な精神と感性にとって、日常の日々は変化の宝庫になる。異境での旅の日々や、世界の制覇に明け暮れる戦いの日々が変化に富むと思うのは、表面だけを見ているからで、それは単に目まぐるしいだけである。何事も起こらない日常の秩序と平穏のなかで、変化は精妙を極めるだろう。果樹園の木々に差す日の光のように、変化は眼に見えないほど微かに、しかし休みなく進むだろう。『エッセー』を書くかれの精神の活動も、果樹園を歩くかれの肉体の享受も、そのなかで始まり、そのなかで深まるのである。」

よく死ぬためには
よく生きることだ

美しき魂よ
しなやかに
おだやかに
こまやかに
変化を受けとめる器となれ

慌ただしさを
変化と見誤ることなかれ
心荒げて戦うことも
戦いに対して戦うことも
変化からの逃避にすぎない

美しき魂よ
よく死ぬために
よく生きることだ
変わることを恐れないことだ
今このときを深く歩みながら



■ジョン・D・バロウ『無の本／ゼロ、真空、宇宙の起源』（青土社 2013.10）

「そもそもなぜ世界があるのかという疑問が、1697年に発表された「事物の究極の起源について」という哲学者のライプニッツの小論文において提起された。世界が永遠であるか、あるいは、キリスト教正統派の教義で主張されるように世界は無から出現したと考えるかは重要ではない、というのがライプニッツの認識だ。あらゆる理論も信仰もいまだに、なぜ無ではなく何かがあるのか、という問題に直面していた。ライプニッツ以降の長くにわたり、哲学者はこの問題にあまり関心を示さなかった。この種の問題は、事物への理解を一步一步構築していく分析哲学の対称ではなかったのだ。ライプニッツの提起した問題は、すべてのことを一度に理解することを要求した。それはあまりに欲張りなことだった。実際のところこの問題は、本質的に解決不能な問題に認定されたも同然だった。ウィトゲンシュタイン（「世界がどのようにあるかではなく、世界はこのようであることのほうが鍵なのだ」）やハイデッガーなど、この問題について考察した哲学者は、その答えを口にするのはほとんどなく、なぜこの問題に人々はこれほど惹きつけられるのかのほうに関心を抱いているようだった。／この問題をめぐる20世紀における新たな展開は、十分に定義された数学的存在の概念には、宇宙論的な意味合いがあるかどうかという考察がなされただけだった。自己矛盾のない規則（「公理」）の体系が構築され、そこから帰結が演繹されたり構築されたりする公理的な数学大系が発展し、かなり特殊な意味において「存在」する数学的な真実が「創造」されるにいたった。論理的に矛盾のない数学的陳述は、「存在」すると言われたのだ。数学者はその後、「存在証明」と呼ばれるようになるものを作り出すことになったが、これは明らかに、物理的な存在よりもはるかに広い概念だ。論理的にありうるものすべてが物理的にありうるわけではないだろうし、それらのすべてが、現在、物理的に存在しているように見えるわけでもない。しかし、アンリ・ベルクソンのような哲学者は、この種の弱い数学的存在が、ライプニッツの問題にたいする満足のいく回答を探すためにもちいうる手段であると革新していた。」「数学的存在は、何であっても「存在」することを可能にする。いかなる陳述も真であるように構成することがつねに可能な公理系もある（陳述が偽になるような公理系もある）。したがって、この種の実在は、実際には何も説明していない。そこで知りたいのは、周囲に見えることのうちこれほど多くのものが、なぜ、一揃いの公理をもつ論理的な規則からなる特定の体系の真理として説明することが可能なのかということだ。これらの公理がさほど風変わりではないという事実から、世界は、驚くほどの程度まで、かなり単純な概念（すなわち、人間に理解できる概念）で描写できることがうかがわれる。」

世界はどこから現れたのか
私はどこから現れたのか

無といったとたん
無は有に向かって開かれる

私といったとたん
私はあなたへ向かって開かれる

なぜ世界はあるのか
なぜ私はあるのか

世界は数であるならば
私は数であるならば
数の謎へ向かうことだ

1といったとたん
1は2へと向かう
2といったとたん
2は3へと向かう

そして数は幾何学の姿をして
世界を私を語り始める



■黒川伊保子『英雄の書』（ポプラ社 2015.9）

「イタリア人は、試合や試験に挑む人へ、こう声をかけるのだそうだ。／In bocca al lupo!（イン・ボッカ・アル・ルポ）／狼の口の中へ、という意味である。／たとえば、サッカーで一点先取していながら、一点を取り返されたとき。イタリア人たちは「やっとゲームが始まった」と高揚し、「狼の口の中へ」飛び込んでいくのである。／彼らにとって、ゲームとは「点をとって、取られて、取り返す」ことであって、「単に点を取る」ことじゃないからだ。」

「『失敗』は、脳の成長のメカニズムの一環で、必要不可欠な頻出イベントなのだ。いちいち落ち込んでいたら、脳が疲弊してしまう。（・・・）／実は、日々の暮らしの中で、失敗を繰り返すしかないのである。／脳は体験によって進化している。／失敗すれば、失敗に使われた脳の関連回路に電気信号が流れにくくなり、失敗する前より、失敗しにくい脳に変わるのだ。（・・・）／この世のどんな失敗も、脳の成長のためにある。失敗の数が多いほど、そして、失敗の「取り返しのつかなさ」が深刻なほど、脳は研ぎ澄まされた直感を手にし、その脳の持ち主は輝かしいプロになり、しなやかな大人になる。したがって、「失敗」は、恐れる必要がない。」

「人は社会的動物で、厳密には他人と連携しなければ生きていけない。しかし、一方で、脳は「孤」の時間をもたないと、世界観が作れないのだ。／自分が何者か知るには、この世を自分独自の世界観で眺めなければならない。与えられた、誰かのそれじゃなく。」

英雄になんかならなくたっていい
勝つことになんかこだわらなくても
べつに成功なんてしなくていいんだ

ゲームは自分が相手なんだから
失敗は失敗なんかじゃないんだし
取り返しのつかないことなんかないんだ

自由な人間になればそれでいいじゃないか
失敗をおそれるなんてつまらない
ひとりでいられるころさえもてるなら

遊び多き人であること
しなやかな人であること
そして愛深き人であることのほかに
なにもいらんないじゃないか



■中島隆博 編『コスモロギア 天・化・時』（シリーズ・キーワードで読む中国古典 法政大学出版局 2015.9）

「司馬談（司馬遷の父）は『六氣』（陰陽家、儒家、墨家、法家、名家、道家）と呼ばれる当時の諸学を治める一方で、三つの重要な学問を学んでいる。すなわち、天官、易、道論である。／天官とは天文学であるが、史官がもともと天を司るべき役職である以上、まっさきに学ばなければならないものであった。また、易は世界と人事とを变化の相において把握する学問であり、道論は根本原理である道とそれが具体化された諸原理である道を学ぶものである。そうであれば、司馬談はその歴史叙述において、人間の歴史を中国の宇宙論的想像力であるコスモロギア（コスモロジー）において把握しようとしたことになる。そして、息子の司馬遷はそれを継承する責任を負わされ、『史記』を何としても完成しようとした。それは、『人間天文学』と武田泰淳が名づけたような、宇宙規模の壮麗なものでなければならなかったのである。」

「西洋哲学が人間の自由意志を問題にする際には、神によって創造された秩序が静的に想定されていて、人間がそこに変化をどうもたらすのかが問われるのだが、それに対して、中国では、天に由来する秩序そのものが動的に変化すると考えられていて、人間もまた最初から変化のうちに投げ込まれ、能動的のみならず受動的にも秩序と絡み合うことが前提とされているのである。／ここで重要なのが化である。（・・・）すべては変化する。これが中国のコスモロギアの基本的な立場である。易はそこに何らかの規則を見出し、その規則を利用して、変化に介入し、それを加速したり、遅延させたり、あるいは方向を転換したりする。（・・・）その介入は、たとえば儒家の用語を用いれば、教化ということになる。教化は、教えを身につけさせることで人をより望ましい方向に変化させることである。」「もう一つ、変化への加入において重要な概念が時である。（・・・）歴史における変化を論じる際に、王夫之は三つの次元を区別し、理における変化、勢における変化、そして時における変化を考えた。その上で、その三つの変化が、時、勢、理という順序で生じると論じたのである。そして、人間が介入できるのは、理や勢ではなく、時である。ちなみに、ここでの時は、抽象的な時間概念ではなく、時宜を得ると言われるような、具体的な状況のことである。／司馬遷に戻ると、彼は天に訴えながら、人間の歴史を叙述しようとしたが、それは抽象的に時間を支配しようとしたのではなく、個々擬態的な時宜という状況を記述することによって、そこを貫く道という規則を明らかにしようとしたのである。それはすなわち、時をどう叙述するかがすぐれて介入的な行為であるということにほかならない。時宜を得ているか得ていないか、適切であるかどうかの判断が、時の叙述にはつねに入っているからである。」

「『中庸』の美德を賛美する『中庸』においても、「時」はそのつどの状況を意味する。／その状況において最善のバランスをとることが、「時中」である。」

天の命

人の命

天は動き

人は動く

道を学ぶ者よ

道を歩む者よ

時は得ているか

中を外してはいないか

変化とともに

変化を超えてあれ



■セネカ『人生の短さについて 他二篇』（岩波クラシックス 1982.11）

（心の平静について）「安定した精神状態をギリシア人は「エウテュミア」と呼んでおり、それについてはデモクリトスの優れた著述がある。私としてはこれを心の「平静」と呼ぶ。（…）われわれの求めているのは、いかにすれば心は常に平坦で順調な道を進み、おのれ自身に親しみ、おのれの常態を喜んで眺め、しかもこの喜びを中断することなく、常に静かな常態に留まり、決しておのれを高めも低めもしない、ということである。これが心の平静ということであろう。そこで、どうすればこの平静に達することができるかを広い見地から求めてみよう。そうすれば君は、万能薬から欲しいものだけを受け取るであろう。しかし他方、悪徳のほうも、ことごとく明るみに引き出さねばならない。そのことから各人はめいめいがもっている悪徳に気付くであろう。それと同時に、君が自分に嫌悪を感じることになれば、あの連中より自分はどんなに苦勞が少ないかを知ることになる。彼らは立派なことを公言していることに束縛され、また過大な名声の重みに苦しみながら、自分の意志というよりも、むしろ名譽感によって自己欺瞞を続けているのである。」

「かくて次から次へと好きなように旅路を渡り歩き、物見遊山の所を変えていく。ルクレティウスが言うように、誰でも彼でもこんなふうな、いつも逃げようとする

のである。しかしながら、自分自身から逃げ出さないならば、何の益があろうか。人は自分自身に付き従い、最も厄介な仲間のように自分自身の重荷となる。それゆえわれわれは知らねばならない——われわれが苦しむのは環境が悪いのではなく、われわれ自身が悪いのである。われわれは何ごとを堪えるにも弱く、苦勞にも快樂にもおのれ自身にも、その他いかなることにも長くは辛抱できない。」

平静でいることは

自分から逃げないこと

自分を照らすことだ

平静が乱れることは

自分の場所を離れていること

自分を他に置き換えていることだ

平静を求めることは

自分に還ること

ひとりの自分に親しむことだ



■ホルヘ・ルイス・ボルヘス／マルガリータ・ゲレロ『幻獣辞典』（晶文社 1974.12）

（ミノタウロス）「人がなかで迷ってしまうようにつくられた家というのは、おそらく雄牛の頭をもつ人間というもの以上に奇怪なだが、その双方はうまく調和し、迷宮のイメージはミノタウロスの姿としくり合う。怪物的な家の真中に怪物的な人がいるというのも、同様に似つかわしい。／半牛半人のミノタウロスは、ポセイドンが海から送った白い雄牛に対してクレータの女王パーシパエーが抱いた、狂おしい情熱から生まれた。女王の異常な欲求を満足させる木の雄牛をこしらえたダイダロスは、彼女の怪物的な息子を閉じ込めてかくしておくための迷宮を建てた。ミノタウロスは人間の肉を食い、この餌にするためにクレータの王はアテナイの市から毎年7人の乙女を貢として取った。テーセウスはみずからがミノタウロスの飢えの犠牲となる運命となったとき、この重荷から自分の国を解き放つ決心をした。王の娘アリアドネーは、彼が跡をたどって紆余曲折たる迷宮の回廊から出られるようにと、彼に糸玉を与えた。英雄はミノタウロスを殺し、無事に迷路を脱した。」

わが内なる迷宮には怪物が棲み
奥処に幽閉されているのだが
怪物は生け贄を求め続ける
燃える欲望が満足できないならば
檻を破って外にでてしまうのだ

生け贄は欲望そのものとなって
狂おしく激しく否応なく
火に注ぐ油の如く燃えさかる
そしてやがて怪物は
すべてを食い尽くしてゆくであろう

私は怪物を退治しようと
八つの魔法で立ち向かうのだが
迷宮は深く輻輳している
帰り道を見失わないためには
アリアドネの糸が必要になる

迷宮はみずからがつくりあげた幻
抜け出すためには幻を超えねばならない
アリアドネの糸はわが鏡
みずからを静かに鏡に映し
道を一步一步辿ってゆかねばならない

mediopos-310

2015.9.22



■加藤晴久『ブルデュー 闘う知識人』（講談社選書メチエ 2015.9）

「ハビトゥスという概念は日本でも広く受け入れられるようになって広辞苑にも載っている。「個々の階級や集団に特有の無意識な行動・知覚・判断の様式を生み出す諸要因の集合をいう。フランスの社会学者ブルデューが提起した概念」と説明されている。／「科学的」概念として「科学的」に定義して使用しているのだから、こういう言い方をするとブルデューに叱られると思うが、有り体にいえばハビトゥスとは生まれと育ちである。ひとは、生まれた家庭環境のなかで社会化していく過程で、ものの「見方・分け方の諸原理」principes de vision et de division、何がよくて何がわるいか、何がのぞましく何がのぞましくないか、なにがおいしく何がまずいか、どんな口の利き方がよくてどんな利き方がいけないか、あれこれの場でどんな姿勢をとるべきか、などなどを身体の中に取り込んでいく。そして、親は一定の階層・階級に帰属しているから、それら身体化した見方・分け方はとうぜん集会的、つまり階級的である。／ハビトゥス以上に「文化資本」の概念が定着している。1990年代、一億総中産化という戦後日本の近代化理論、イデオロギー的神話が崩壊して、格差社会がクローズアップされてきた風潮と無縁ではない。やはり広辞苑に載っている。「言葉遣い・振る舞い方・知識・学歴・資格など、個人が身につけていく文化的な特性。ブルデューの用語。上層階級出身の方が獲得しやすい。」／実践感覚、ゲーム感覚、戦略として作動するハビトゥスは資本という形で存在する。資本であるから、蓄積・投資・運用・移転（継承／相続）の対象になる。そして利益を生み出す。／ブルデューは社会を支配・被支配の力関係の場と考える。ふつうは、この力関係を左右するのはそれぞれが所有する資産、つまり経済資本の多寡である、と考えられているが、ブルデューはそれだけでなく社会的出自、学歴、教養 culture など非経済的な要因の重要性を統計的に確認し、これを「文化資本」capital culturel と呼んだのである。」

道化を演じるために

学ばねばならない身振り手振りには
知恵が宿っているだろう

けれども

自分を道化だと知らない道化が
身につけているそれらは自由を欠いている

たとえ道化でいることが

避けられないことだとしても
時代はみずからの道化をどのように演じるか
自由を与えているのではないか

闘いを挑むならば

演じずに演じている

みずからのペルソナに対してではないか

鏡に映ったみずからの道化を見つめ

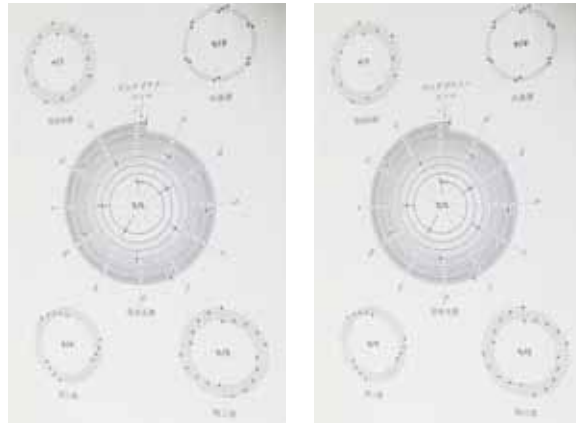
その悲しみを超えるために

新たな身振り手振りで

自由へとはるかな挨拶を送るのだ

mediopos-311

2015.9.23



円ではなく
らせんを描くことで
音宇宙は展開しているのか
対称性が破れて
宇宙が展開されるように

鏡のなかの私が
私と不思議な不均衡を
演じ続けざるをえないのも
すべてはオクターブのずれから
生まれているからなのかもしれない

円相が奏でられるのも

円ではなく

らせんではないか

決して止まることのない

無限が展開する存在の遊戯として

■アンソニー・アシュトン『ハーモノグラフ／音がおりなす美の世界』（ピュタゴラス・ブックス／ランダムハウス講談社 2005.11）

（第十九章 調律の問題／ピュタゴラス・コンマ「音程は必ずしもすっきりとした関係になっていない。よく知られた例が、オクターブと完全五度（3：2）との関係だ。／次ページの真ん中の図では、中心に近い0の位置でどれかの音が鳴ったとして、そこから完全五度の音程でらせんを描きながら外向きに進んでいく（一ステップごとに番号が振ってある。らせんの一周がオクターブに相当する）。五度音程を十二回取ると七オクターブになるが、図からわかるように、最後の音はオクターブを少し行き過ぎ、わずかにシャープがかかる。こんなことが起こるのは、五度を十二回重ねれば $(3/2)^{12} \div 2^7 = 129.75$ になるのに対し、オクターブを七回重ねたものは $(2/1)^7 = 128$ にしかならないからだ。この音程差、 $(3/2)^{12} \div (2/1)^7 = 1.013643$ のことをピュタゴラス・コンマといい、比で表せばおよそ $74 \div 73$ である。／さらにらせんを進んでいくと、中国では古くから知られていたように、完全五度（これを＜羽（う）＞という）を五十三回重ねたところで、ほぼ厳密に三十一オクターブになる。最初の五つの五度音程はピアノの黒鍵のパターンである＜五音音階＞になっている。／前ページの四隅の図は、それぞれ長三度（5：4）、短三度（6：5）、四度（4：3）、全音（9：8）を重ねて作ったらせんだ。どの場合も、オクターブはらせんの一周に相当する。／こんなずれが生じるのは奇妙に思われる。これまで見てきた音の関係はきれいに調和していたのだから、音の体系もすっきり調和していてもいいのではないだろうか？ ところがそうはなっていないのだ。このわずかなずれには、宇宙は量子の不確定性に従って対称性の破れにより形成されたという科学的世界観と響き合うものがある。そして科学においては、厳密で包括的なすべてを説明する理論は、（今のところはまだ）作られていない。完璧であるよりもニアミスのほうが美しいケースがあまりにも多いのは、そのせいなのだろうか？」

mediopos-312

2015.9.24



■エドワード・フレンケル『数学の大統一に挑む Love and Math』（文藝春秋 2015.7）

「数学の世界で過去半世紀のあいだに生まれたもっとも重要なアイデアが、ラングランズ・プログラムだ。大きくかけ離れて見える数学の各領域のあいだに、さらには量子物理学の世界にまで、胸躍る魅力的なつながりがあるという刺激的な予想だ。」

「それぞれの数学を「島」だと考えてみよう。大部分の数学者はその島を拡張する仕事に取り組んできた。しかし、あるとき、「島」と「島」をつなげることを考えた数学者が現れた。悲劇の数学者ガロアが死の前日に残したメモにその革新的な考えがあった。」

「写真は実は時間という次元を加えた四次元の世界を二次元に落とし込んでいる影と考えることができる。数学は四次元以上の高次元を、三次元、二次元の世界に落とし込み記述することで、より複雑な世界を理解する唯一のツールなのだ。」

「最大の挑戦は、ラングランズ・プログラムに四つ目のコラムを打ち立てることだ。すなわち量子物理学との関係を調べることである。多次元の問題を二次元、三次元におとしこみ、その試みが始まる。物理学者は数学者の発見した空間を再発見する。」

数学の島と島をつなげることで
物理学の島と島をつなげられるのならば
心の島と島もつなげることができるのではないか

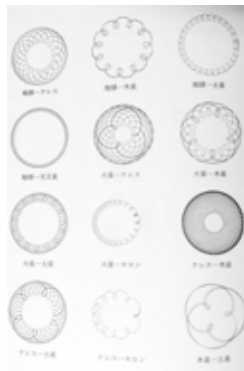
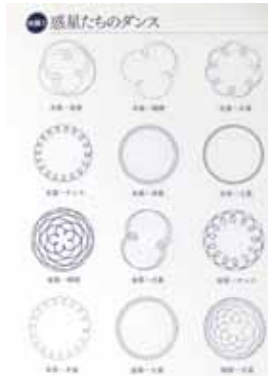
私の心のなかの島と島
私とあなたの心のなかの島と島
私たちの心のなかの島と島

ひとりにいるときに
人は愛することができるように
私はひとつの島としてあらねばならない

そうすることで島は成長しはじめ
やがて島と島はつながってゆく
まるで愛が広がっていくように

mediopos-313

2015.9.25



星と踊れる
歌を歌おう
数と遊べる
自由を手に
一なるもの
多なるもの
むずびつつ
大地の祈り
天空のキス
懐かしき郷
夢の彼方へ

■ジョン・マルティノー『星たちのダンス／惑星が描き出す美の世界』（ピュタゴラス・ブックス／ランダムハウス講談社 2005.11）

「過去数世紀のあいだにはたくさんの科学上の発見があった。それにもかかわらず、私たちが今ここで何をしているのかを理解するにはほど遠い状況だ。それはちょうど、古代人が電卓を作るまでには遠い道のりがあったのと同じことだろう。しかし古代の人々は、意識について深く思索し、生命、あるいは「魂」は、芸術や音楽ときわめて近い関係にあると考えた。そして彼らはこれらの芸術を通して、「一なるもの」と「選ばれし少数なるもの」との関係を注意深く調べたのだった。それというのも、調和する音はごく限られ、整った形もごく少数しか存在しないからである。ケプラー、ニュートン、アインシュタインをはじめ多くの人たちは、自然のなかに単純で美しい関係を見出そうと努め、そのような関係が見付かれれば数式によって表してきた。／しかし本書では、太陽系のなかにある単純で美しい関係を、数式ではなく和音と幾何学によって表してみた。古くから生命と結びつけられてきた黄金比は、現代の数式には不思議なほど姿を見せない。しかしこの特別な比は、今も慈しむように地球にまわりついているのである。このことは、私たちが今ここに存在する理由や、私たちが何者であるかに関係しているのだろうか？ もしも関係があるのだとすれば、本書のなかで使った和音や幾何学のテクニックは、太陽系以外の惑星系に知的生命を探し出すためにも利用できるのではないだろうか？ 私たちのような生命が誕生するためには、現代の宇宙論が教えてくれる以上の不思議な力が必要なのかもしれない。そのことを実感したければ、ヴィーナスのキスを思い出すといい。そしてまた、ジョン・ダンの思慮深い言葉も――。

「人間は網に編み、それを天空に投げかけて、星たちを自分のものにした。／もはや人びとは丘を登ることも厭い、天国に行く努力も怠って、／むしろ天を自分たちのほうに寄せようとしている。」

mediopos-314

2015.9.26



■伊雄大『やわらかな言葉と体のレッスン』（春秋社 2015.7）

■伊雄大『体の知性を取り戻す』（講談社現代新書 2014.9）

「知性とは脳の働きだと考えられやすい。だが、誰ひとり心臓を頭で考えて働かせているわけではない。根本的には体の知性なくして私たちは生きられないのだ。／その一方、握手がそうであるように、体の働きは私たちにとってはさりげなさすぎて、よく見えない。知性とは言ってみたものの、「こういうものだ」と明らかに指し示すことなど到底できない。なぜなら、知性は「私たちがこうした体をもって生きていること」と関わっており、それは人が生まれてこの方、謎であり続けてきたものだからだ。／（・・・）いまのところ謎に取り組むには、頭で考えたところで間に合わないことだけはわかっている。ではどうすればいいだろう。わからないこと、未知の出来事に会ったとき、私たちはどうしただろう。幼い頃、自転車に乗れるようになるには、乗って見ないと始まらなかったはずだ。だから、まずはやってみる。そして体自体に教えてもらう。」

「人の数だけ考え方はある。だから、特定の基準を設けて善し悪しをつけるなど至難の業のはずだが、「この考えはいいが、あれはダメだ」といったことをしょっちゅう私たちは行っている。しかし、不思議なことに、そもそも「そのものの見方は何が決定しているのか？」についてはあまり考えないようだ。」

「『考える』ことを頭だけに任せ、ともかく答えを知ることには重きが置かれている時代です。誰もがそのようなやり方のみが『考えることだ』と思うのであれば、そこで出された答えは似たり寄ったりになってしまうでしょう。実際、頭では「多様性が大事だ」とわかっている、いったん事が起こると、すぐに賛成か反対か意見を割り切りたがる傾向があるようにも思います。」

「謎の解明ではなく、謎そのものと言葉を交わしてみる。問いかけてみる。そのこと自体が新たな発見をもたらす、思考の芽生えにつながっていくのではないかと考えています。／そうした待ちの姿勢が取れるようになると、だんだんと謎のほうがちらをノックしてくれるようになります。」

「どちらかと言えば謎は重々しいどころか、ほとんど取るに足らないと感じられるような、吹けば飛ぶような軽さに本質があるのではないのでしょうか。」

「重要なことは、あまりに当たり前のことは、その存在を疑いもしない、ということです。なぜなら、そこにはさりげなさしか感じられないし、特別な意味が何も無いように思ってしまうからです。／厳かさや深遠さをわざわざ見つけようと、どれほど探索してみても真に切実な謎とは出会えないのではないのでしょうか。謎は賑やかな恰好はしておらず、ごく軽やかな風としてあたりを吹いています。そのような謎と会うにはうっかり見過ごしてしまうくらいのことには注目してみる必要があるのではないかと思います。」

なぜそう考えるのか
なぜには理由がある

なぜの答えではなく
なぜの出でくる理由

なぜを追いかけてみる
するといつのまにか
なぜは見えなくなると

なぜを待ってみる
するとなぜは
やがて訪れてくる

なぜと話してみる
風と話すように

するとなぜの理由を
少しだけ呼吸できたりもする

いつも会っているのに
気づかないでいただけ

そしてなぜはいつのまにか
また見えなくなってしまう



■荒俣宏『理科系の文学誌』（工作舎 1981.6）

「さる数学者があらゆる芸術を指して、「窮極的には宇宙を表現するためのもの」と定義したが、これはまことに至言であると思う。数学や物理学のような理学でさえ、しょせんは宇宙を表現するための美学、つまり<芸術>でしかないからである。／文学が宇宙をテーマにしたのは、ほとんど言語文化発生期にまでさかのぼる太古の話に属するわけであるが、科学による新しい世界像が確立した時代以降であっても、その事情は根本的に変わっていない。文学は実現に先行する一種の予行演習として、たとえば、応用化学がのちに実現することになる種々の宇宙飛行法のさきがけなどを提示したのである。しかし今日、文学の想像力を過信するあまりにともすると忘れられがちであった<もうひとつの芸術>が存在することを、ここであらためて指摘しなければならない。それは、アルキメデス的な意味における応用科学とは別ものの、俗に思弁科学あるいは旧称を自然哲学と呼ばれる<芸術>である。宇宙に関する文学は、まずこの自然哲学がひらいた想像の論理の啓示を得て、華ひらくことになるのである。実際、十九世紀までの思弁科学は確実にその時代の<狂気>と<幻想>を産みだしたし、科学者自身があえて文学的な<幻想>をめざしていた節さえ見られるのである。その意味から、宇宙の真実を表現する各美学の優劣を競う上で、文学が科学的空想を超えているとする所説は、おそらく狭隘に過ぎよう。俗に、SFを指して、科学と文明の未来を先取りする文学形式、と称賛する向きがあるが、これははなはだしき誤解であるといえよう。SFはむしろ、科学に寝返る<文学>として、長らく科学的想像力の後塵を拝する立場にあったというのが、実状である。」

初めに言葉があった

万物は言葉によって成った

言葉のうちに命があった

数式は言葉である

宇宙は言葉で表現される

科学は文学である

文学は宇宙を表現する

想像力よ飛翔せよ

言葉よ命とともにあれ

命は人間を照らす光

闇は光を理解しない

けれど光は闇のなかで輝く



今というこのときを
流れのなかでみるか
深みのなかでみるか
二つの今が交錯する
存在と無の交流電灯
俗と聖のせめぎあい
無常と永遠の狭間で
私は今を生きている

■榎垣立哉『日本哲学原論序説／拡散する京都学派』（人文書院 2015.5）

「わたしは、西田の議論において一貫して流れている、水平性と垂直性との交錯を、そこでの軸として設定することにしたい。そして、水平的な事象への接近を、つねに垂直的な深化において論じつつ、しかしその両者を、まさに矛盾の交錯としてあつかう姿勢に、西田の本質的な特徴をみてとりたいのである。こうした垂直性に対抗したり（田邊元）、そのあり方を「あいだ」と規定したり（和辻哲郎）、さらにはこの交錯の一点に、構想力としてのポイエシス論をおいたりする（三木清）ことが、日本の哲学の根幹を形成してきたといえるのではないだろうか。このような流れは、西田とは一見するとかわりなく（あるいは、思想的流派や政治性からみれば対極にあるような）大森荘蔵や廣松渉がとりあげる「こと」の哲学のなかにも、密かに響きわたっているとさえ考えるのである。／では、こうした水平性と垂直性の交錯の局面とは具体的には何であろうか。さしあたり西田の中期の議論からとりだされる「永遠の今」に、その重要な位相がみてとれると考えたい。この議論は、まさに木村敏が「イントラ・フェストゥム」として重視する

mediopos-317

2015.9.29



■河合俊雄『ユング／魂の現実性』（岩波現代文庫 2015.9）

「ユングの『赤の書』は、前近代的な心性が失われようとしているために、神話的で靈的なものが普通に体験できなくなっていたからこそ注目を集めたという時代性を背景としている。そして神話的で靈的なものはそれ自体で存在しているのではなく、こころの中で起こることとして心理学的に理解しようという機運が生まれ、そこに文学や芸術との接点が生じてくることによって『赤の書』のような作品は形成されたといえよう。その意味で、ユング（1875－1961）とほぼ同時期に生涯を送った柳田国男（1875－1962）が、『赤の書』と数年の違いである1910年に『遠野物語』を書いているのは興味深い。『遠野物語』も、民俗学の研究書であると同時に文学であるというように、学問と文学の境界に生じてきている。そしてこれも、山人をはじめとするあの世から出てきた異界の存在に遭遇するということが当たりまえでなくなりつつあり、失われつつあったからこそ、書き留められたということが言えよう。だから1910年の以前にも、以後にも『遠野物語』は書かれえない。同じような理由で『赤の書』というのは、前近代的世界が失われていこうとするときに可能になったもので、『リビドーの変容と象徴』（1911）で神話を研究したユングが、自分自身の神話の不在を感じたからこそ生まれてきたのである。」

「ユングの『赤の書』は、前近代の世界観をあくまでも近代意識の中に収めようとした側面と、身体における体験や死へのインターフェイスなどを通して、さらに超えていこうとした側面があると考えられ、それはわれわれにとって今なお重要なヒントを与えてくれるかもしれないのである。また身体や死へのインターフェイスとしていくあり方は、たとえば『ねじまき鳥クロニクル』における「壁ぬけ」のシーンのように、夢とも現実ともつかない場面をしばしば小説で描いている村上春樹の世界との共通点も感じさせてくれるのである。イメージや夢を内面的なものではなくて、現実や死者につながるインターフェイス的なものとして考えていたのは南方熊楠もそうである。このようにところから、ユングの新しい理解をもたらし、ひいては現代のこころの探求についての貢献を行うことが可能であるように思われるのである。」

過去へ戻ろうとしても

過去へは戻れない

未来へ進もうとしても

未来への橋はまだ架けられていない

神話はただの物語となり

神々はもはやどこにもみつからない

神話はみずから紡がねばならない

内なる神々を育てねばならないのだ

世界に張り巡らされた迷路には

アリアドネの糸は見つからないだろう

内なる曼荼羅に世界への道を見出す者は

自らの新たな神話の書にその導きを見出すだろう

mediopos-318

2015.9.30



■西加奈子『ふくわらい』（朝日文庫 2015.9）

（解説：上橋加奈子「世界を吹き飛ばす風」）より

「私たちの日常の多くは、実は、自分と他者との共同作業で紡ぎだしている「つくりごと」で成り立っているわけですが、日々の暮らしの中で、そのことに気づくのは、とてもとても難しいことです。私たちは無意識に世界を紡ぎ、その巣の中で、これが自然だと思って暮らしているわけですから。／ところが、ときに、突風のようにすべてを揺さぶって、「自分たちが生きている世界は、実は、自分たちがつくっている世界でもあるのだ」と、気づかせてくれる物語が現れる。／これしかない、と思いついていた世界の姿が、その物語を読むことで、ぱっと吹き飛ばされ、バラバラの紙吹雪に変わり、やがて、再び、ゆっくりと戻ってきて、もとの世界の姿をつくっていくのを見る。――そのとき、ああ、そうか、そうだったのか、という気づきが、新鮮な感動とともに、心に広がって行く。／物語が命をもつ、というのは、多分、そういうことなのだと思いますが、しかし、そんなふうに、命を持ちえる物語は、なかなか生まれるものではありません。／『ふくわらい』は、世界をバラバラにぶっ飛ばす風のような力を持った、稀有な物語なのです。」

縛っているのか
縛られているのか
作っているのか
作られているのか

そうでなくてもいいんだ
そう思えたときに
世界は一瞬にして吹き飛ばされる
そしてまた世界は新たな姿で現れる

たとえそれがまえと同じ姿であるとしても
そうでなくてもいい世界と
そうでなくちゃいけない世界とは
まったく仕掛けの違う別世界なのだ

世界をただ追認する物語には
ただの機械仕掛けしか
見つけることはできないだろう
世界をただ追認する人には
ただの機械仕掛けの道徳しか
見つけることはできないだろう

mediopos-319

2015.10.1



はるかな冒険にでるといことは
未知の自分を旅するということだ

世界は鏡に映されて
私の前に広がって見える
見えているのは私の姿なのだ

敵と見えるものは自分のなかの敵
導きの言葉となるのは自らのアリアドネの糸

大宇宙に望遠鏡を向けるなら
内宇宙に曼荼羅の星を見つけることだ

■ローレンス・アイズリー『星投げびと／コスタベルの浜辺から』(工作舎 2001.11)

「私はいまでも宇宙への冒険は無意味なことであるという強迫観念にしばられている。内的膨張、つまり、宇宙の内側へと向かう永遠の成長と、望遠鏡で追いかけてつづけるはるかかなたの小宇宙群の飛散とが同時進行で起こっていないければ、無意味だ。／あの孤独な山頂で、私の心はついにむきを変えたのだ。私がこれから語ろうとしているのは、あの内的天空の領域からのことだ。それは夢の世界であり、たとえアルクトゥルスまで行っても、私たちが決して逃れることのできない光と闇の世界だ。人間の内的天空は、いかなる空無へも、時間の果てへも、彼とともにおもむくだろう。この内的世界はある一点においてのみ外宇宙とは異なっている。内的世界は、それを生みだした宇宙よりもはるかに気まぐれで動きがはげしく、より恐ろしく卑しくもなり、しかもそのうえ、気位が高いのだ。この大変革の世代の教育者にとって、私たちがあの内的天空でうながしてきた変化は、すくなくとも、ゴールを月の軌道のむこうに定めている連中の仕事と同等の重要性をもって立ちあらわれた。／人間の頭のなかにはそれぞれ異なる固有の世界があることを、人から教えてもらう必要などない。しかし、電波望遠鏡を向けて、宇宙の果ての出来事を示すザーザーという音にたくさんの人間が耳を傾けている今日、他人の宇宙は、都会の不潔なごみ捨て場のただなか、救いようもなく貧困だ。(…) アーク灯のもと、テントのなかで上演された偉大なオペラを、友人である詩人とともに鑑賞していたある夜のこと、かの詩人が私の腕に手を置いて無言で一点を指さした。はるか上空の闇のなかを一匹の巨大な蛾、アカスジシンジュサンが、歌手たちに投げかけられた光から光りへと、ぎこちなく羽ばたいていた。／友人は興奮しながらささやいた。「あの蛾は知らないんだ。自分が、明るく輝く見知らぬ宇宙のなかを通過していることを。彼には見えやしない、彼は彼で別の芝居を演じているのさ。彼には私たちは見えていない。彼は何も知らないのさ。もしかしたら、それはぼくたちだっておなじなのかもしれないがね。ぼくたちはどこにいる？ いったいだれの芝居が本物なんだ？」



■藤井貞和『日本語と時間／<時の文法>をたどる』（岩波新書 2010.12）

「<き、けり、ぬ、つ、たり、り>という、古文では六種の時に関する助動辞があった。「けむ」もあり、ari（あり）もかぞえると八種（「あり、とゝり、を一緒にしてよければ七種）。多様な時の考えを古代の人びとは持ち、それらを日常的に使い分けて、かれらは言語生活を送っていた。かれらの毎日が何と豊かで面倒だったかを想像すると、たいへんだなと気の毒でもあり、うらやましくもなる。／そんな複雑さをどう現代語訳すればよいのだろうか。<き、けり、ぬ、つ、たり、り>の六種は、近代に「～た」一つになった。六種がたった一種に！である。「けむ」は現代語「～たろう」（あるいは「～ただろう」）となり、ari（あり）が現代語の「～である」のうちに生きのびている。／明治時代の改良論者のなかには、文語の<き、けり、ぬ、つ、たり、り>が「た」一つになり、こんな便利な時代はないと礼賛する人もいた。ほんとうに便利になったのだろうか。便利になるとはどういうことだろうか。／言文一致の時代がやってきて、『源氏物語』などの古典の現代語訳では、もっともっと恐いことが起きた。「き」が「た」になり、「けり」が「た」になり、「ぬ」が「た」になり、「つ」が「た」になり、「たり」が「た」になり、「り」が「た」になり、それだけではない、「き」でもなく「けり」でもなく「ぬ」でもなく「つ」でもなく「たり」でもなく「り」でもない、非過去で投げ出されている裸の文末までもが「た」になった。」

時よおまえに
名前があるならば
どんな名前で
呼べばいいのだろう

時よおまえが
ただの過去現在未来でないならば
そして豊かな深い奥行きがあるならば
それをどう表せばいいのだろう

時よおまえは
わたしの心なのか
おまえの言葉が失われてゆくならば
私は心を失ってゆくのだろうか

過去になってしまった時を
ただ抱きしめているしかないのだろうか
未来になろうとする時を
ただ待ち続けるしかないのだろうか
今という永遠の時間を
ただ耐えるしかないのだろうか

時よおまえに
ほんとうの名前があるならば
無限の命をたたえた名前があるならば
その名で呼ばれるのをずっと待っているのだろうか



■風の旅人 復刊6号『時の文(あや)～不易流行～』(かぜたび舎 2015.10)

佐伯剛：一つのコスモロジーが終わり、始まる時

「古代より人間は、自分をとりかこむ世界についてイメージを構築し、その世界でどう生きるべきか考えていた。(・・・) / 二〇世紀になって相対性理論や量子論など、光の速度や素粒子といった人間の現実とはかけ離れた領域の物理法則を基本とする宇宙観が権威をもつようになり。その宇宙観が人間の死生観にどんな影響をもたらすのか今のところ不明だ。(・・・) / 何が真実なのか定義付けの難しい時代において、映像は、客観的な真実を示すというよりも、世界の捉え方を視覚的に導く経験の場でもあると言える。 / 既に言葉によって認識済みの硬直したコスモロジーやアイデンティティーに安直に寄りかかって、それをコピーするだけの映像は世の中に溢れており、そうした映像は何ら新しい体験とならないが、見る者に認識の変容を起こさせる可能性を秘めた映像もある。その映像は、言葉で使えきれないものを伝えているというよりは、言葉と言葉以前のあいだをつないでいる。 / 言葉以前のイメージの中で、人間と世界は錯綜し、絡み合っているが、その状態は、日本書紀の「混沌れたること鶏子(*注：卵のこと)の如く、溟にして牙を含めり。」のように何かしらの予兆を孕んでいる。 / 一人の個人の心の中に芽生えた認識が、言葉やイメージによる媒介を通じて主観的な枠組みを超えて、他の人にとってモリアリティの感じられるものとなる時、そこから次なる世界と共有する理念(徳や哲学)が育っていく可能性もある。 / その際に配慮すべきことは、現在の私たちは、地球上の様々な国の物や仕組みが複雑に織りなし、太陽系の端から端まで精密な映像体験が可能な時代に生きているということだ。それゆえ、日本という自分の足下を知ることは大事だが、そこだけに意識を限定させるわけにはいかない。 / 私たちが歩んでいる道は、もっと多様で広大な世界の中にあり、その道の教えもまた、それだけの多様性と広がり求められている。」

終わりと
始まりと
螺旋の蛇のように
時はめぐり
私の扉が開かれる

見えない大切なものが
見えるならば
聞こえない大切なものが
聞こえるならば
その扉をあけて

風は吹くだろう
雨は降るだろう
陽は注ぐだろう
地は揺れるだろう
終わりは始まりとなるだろう

時は刻むだろう
まだ見ぬ文字を
文字は描くだろう
まだ見ぬ宇宙を
そして道は示されるだろう
変わらぬものを秘めながら
変わり続ける形のなかで

mediopos-322

2015.10.4



■伊東乾『サウンド・コントロール／「声」の支配を断ち切って』（角川学芸出版 平成 23 年 3 月）

「かつて『さよなら、サイレント・ネイビー』を書いたとき、僕は「情動は気づきに先立つ」と記した。人の脳内プロセスを慎重に検討するなら、より原始的な脳である感情・情動が素早く作動して僕達の主観や意志を決定してしまい、遙かに遅れて合理的な思考が働く頃には、先入観に基づいてしか人間はモノが考えられない。／また「行為は悟性に先立って意志を決定する」とも書いた。危機的状況、例えば熱い葉罐に触るとか、そんなことでもいい。強い刺激があれば僕たちは反射的に行動する。モノを考えられるのはそれより遙かあとのことだ。／『さよなら、サイレント・ネイビー』から五年、いろいろな試行錯誤の末に僕が得た次の理解は、あとから考えれば実にシンプルなものだ。／「主観」や「正義」は理性より先に「感情」があらかじめ決定している。／「善悪」の価値観。あるいは「これは正しい」と私たちが確信を持つ「正義」、もっといえば、自分自身の「自由意志」だと思っている「主観」による判断。こうしたものの大半は、実は生い立ちから今日に至る経緯でのさまざまな精神的外傷によって、あらかじめ刷り込まれている事が大半なのだ。／そしてその「価値観の刷り込み」に最も効力を発揮するのが「声のメディアの被爆装置」による反復に他ならない。／耳にまぶたは存在しない。僕たちはサウンドによるマインド・コントロールに対して常に無防備だ。「声」は気づきに先立ってやってくる。そして僕たちの心の中に住み着いてしまう。いつの間にか心の住人の顔をして、価値観や正義、善悪、自由と思っている自分自身の判断にまで、号令を下すようになる。／サウンド・コントロール。最初から悪役が悪者であるという同語反復のメディア被爆。この悪循環を逃れるために、言葉をもって音を断ち切らねばならない。一度完全な静粛の中に実をおいて、静かに文字の沈黙と向き合うこと。そしてそこに自分自身の生きた息をどのように吹き込むべきか、繰り返し試行錯誤すること。その過程で善悪や正義の判断を逡巡するところにこそ、本当の意味での人間の自由がある。／自由とは迷うことだ。これが正しいと言われた道筋をなぞることは、実は自由でも何でもない。信憑性の高い複数の「正義」の間で立ち止まり、逡巡し、迷い悩むこと。ここにこそが自分自身の心で感じ考え、ついには判断を下すという、人間の本質的な自由があるのだ。」

正しいことは正しい！と思うことは
多くの場合正しくはないだろう
その正しさは自由からではなく
刷り込まれた同語反復からやってくるからだ

私たちは正しい！と叫ぶことも
多くの場合正しくはないだろう
正しさの基準になるのが
みんな正しいと思っている
ということになるからだ

正しいと判断するためには
ひとりの孤独な作業が必要となる
ひとりの不安で迷いの多い時間が必要となる
ひとりということは
自らが責任を負うということだからだ

必要な情報をもとに
多くの仮定と推論で
複数の観点から辿りながら
さまざまに逡巡し
あえて選にとった複数の道から
さらにひとつを選ばなければならない

すでに決まった道を与えてくれる
ナビゲーションは存在しない
自由はみずからが道を作り
その道をひとり歩むことだ

ひとり歩む者が自由のままに集うとき
そこにあるのは一色で塗られた
同語反復の正しさではない
白でも黒でも灰色でもない
自由をともに歩もうではないか



■星野博美『のりたまと煙突』（文春文庫 2009.5）

「人間というのは、自分のものは捨てたくないが、人のものなら簡単に捨てられるな、とふと思ひ、それが言葉以上に重みを増していった。／次世代、あるいは次々世代がいれば、家や土地、財産、記憶、遺品、それらは曖昧に手渡しておけば、それを彼らが守るのか、破棄するのか、それともなんらかの理由で消滅するのかはわからないが、少なくとも自分で廃棄を決断する必要はない。ところが次世代のいない私たちは、この膨大な量の、日常生活にはまったく必要のないものの、それを永遠に目にすることができないと知ったら動揺するような過去の遺物を、自分たちの手で始末しなくてはならないのだ。そして仮に人が年齢の順に寿命を迎えるのだとしたら、最後の最後の大始末は、私に回ってくる。自分の過去だけならともかく、先に逝った家族の過去も清算しなくてはならないのである。／次世代によいものを手渡したい。人はよくそんなことをいう。その美しげな響きは、百パーセント本心ではなくとも、ある程度は真実なのだろう。あれも残してあげたい、これも残してあげたい、という思ひは、確かに愛の変形なのだろう。／しかしそこにこんな思ひは隠されていないのだろうか。／自分には捨てられないものを、次世代に捨ててもらいたい。自分が生きていた証を自分で捨てるのは、あまりにも辛いから。／次世代の有無によって、人はまったく異なった方向に向かって歩き始める。一方は、残す人生。もう一方は、片付ける人生。（・・・）／私はかつて、最晩年の祖母が「喜之助が土産に買ってきてくれたドイツの万年筆がなくなった」とか「兄貴が来ていたのに、もう帰ったか？」と騒ぐ理由が、なぜなのか理解できなかった。その理由が、わかったなどというつもりはないけれど、それこそ祖母が最後まで覚えていたかった記憶なのだ、というところまではわかるようになった。／そして思った。自分は最後に、どんな記憶を覚えていきたいのだろうか？」

覚えていたい
忘れたいか
覚えておいてほしいか
忘れてほしいか

私の死とともに
すべて失われるとしても
私の死を超えて
すべて永遠に残るとしても
記憶という不可思議絵巻は
切ない思ひを激しく振幅させる

人類最後のひとりになって
自分とともに人類の記憶はすべて消滅する
そんな夢をしてみる
自分の生きてきた証も
人類の生きてきた証もすべて消滅する
誰に伝えることもできないまま

どんな記憶もすべて失われることなく
生死を超えてすべての人に共有される
そんな世界を夢想してみる
記憶のデータベースが宇宙そのものとなり
すべてが永遠のもとに残り続ける
誰に伝える必要もない記憶宇宙

幸福に生きるために
私はどんな記憶とともに生きればいいのか
幸福に死ぬために
私はどんな記憶とともに死ねばいいのか
生と死をめぐる
記憶と忘却の戯れのなかで



■中島渉『花と死者の中世／キヨメとしての能・華・茶』（解放出版社 2010.11）

「一遍の教えはとてもシンプルだ。阿弥陀仏への信不信は問わない。浄・不浄も関係ない。ただ念仏を唱えるだけでいい。そうすれば極楽へ往生できる。そう説いた。さらに、念仏を唱えながら踊ったのだ。踊念仏は時宗を象徴するものとなっていった。女も子どもも病者も、太鼓や鉦を打ち鳴らし、念仏を唱え、踊った。河原の刑場、市庭や辻で踊り念仏をし、念仏札をくばった。かれらは死者による怨霊を鎮魂し、世俗のいっさいから解き放たれた無縁の場を祝ったのである。」

「時宗は京都の寺で踊念仏とともに連歌会をひらき、民衆のあいだに連歌をひろめた。遊行する時宗の一行はさらに連歌を地方に伝播させてゆく。アドリブと機知が重んじられた連歌は、村落の発展とともに室町時代から南北朝期にかけて庶民のあいだにひろまり、連歌を中心とする寄り合いが、村々に生まれていった。」

「さらに時宗と連歌の関係をながめると、「花の下連歌」が浮かび上がる。これは鎌倉中期から室町末期までつづいたもので、文字どおり春、満開の桜の下で連歌を愉しむという趣向だった。満開の花は生命力の謳歌を示すと同時に、やがて枯れてゆくことを暗示する。花が枯れ生命力が衰えると、怨霊が跋扈することとなる。／花の下とは異界へ通じる扉でもあった。あえて異界の扉を開き、そこに住む怨霊（御霊）を慰撫するために、連歌という言霊の咒術が必要とされたのだろう。」

「このころ盛んにおこなわれるようになった立華を見ていこう（・・・）。／立華はまた時宗とかかわりが深い。時宗僧で華事にたずさわる者として、蓮阿がいる。（・・・）足利將軍に重用され、立華で活躍した同朋衆でよく知られるのは、立阿弥・宣阿弥・正阿弥だ。かれらの立華は室町期に大きな潮流のひとつで、のちに「阿弥派」とよばれるようになる。」

「世阿弥にとっては、あらゆるものが花であった。生者だけではない。怨念をのこして成仏できない死者も花であり、死者をふくめた人間存在すべてのものに花を見いだす。それがキヨメとしての能楽師の究める道であると。／夢幻能で世阿弥は、死者が現在を生き、生者が過去をさまよう世界を描いた。鬼や死者の妄執、怨念を舞台によびもどし語らせる。それを聞き弔う生者こそ、「乞食」と蔑まれながら、魂の鎮魂を浄化するわちキヨメをになった我々なのだ——猿楽の巨人・世阿弥の自負はそこにある。」

生と死を超え
浄不浄を超え
善悪を超えて
すべてを花に

死者とともに
生者とともに
すべてを浄め
すべてを花に

南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
踊れよ踊れよ
ただただ踊れ

満開の花の下
異界を開きて
怨念を語らせ
鎮魂を事とす

死者とともに
生者とともに
すべてを浄め
すべてを花に

南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
踊れよ踊れよ
ただただ踊れ



■川田順造・坂部恵=編／池上嘉彦・斎藤正彦・田淵安一・森本雅樹・佐藤聡明

『ときをとく／時をめぐる宴』(リポロポート 1987.12)

佐藤聡明「例えば消えさる音に耳を澄ます。／音は沈黙の大海（おおわだ）に飛び行きて、音のない「間」が生じる。この「間」は単に非物質的な力学で緊張した空間ではない。私達がそこに膨大な音が流転する無限の空間を、無数の時が生死する永劫の刹那を聴くのである。／私達に感動が齎されるのは、宇宙の相ともいうべき、純粋な音が、一瞬、光り輝くのを聴くからである。その時、刹那は遍く一切に通じ、無始無終の開闢へと、私達を旅立たせる。」

とかれぬとき
ときは無である
とかれることで
ときは姿を現す

問われぬとき
ときはしられる
問われるときに
ときは謎となる

ときのはじめと
ときのおわりと
つながりながら
またはなれゆく

ときのながれに
ときをゆだねて
夢見ているのか
私というときを

永遠というとき
刹那というとき
私は往還しつつ
いまを生きるか